

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第41号

2005

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成18年3月20日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条2項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	高山 京子（宮城県）
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	甲第41号
学位授与の日付	平成18年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当
論文題目	林芙美子とその時代
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 藤沼 貴 文学研究科教授 委員 大久保 典夫 文学研究科客員教授 委員 中野 毅 文学研究科教授

学位請求論文審査及び最終試験報告書

博士(社会学)

2006年 1月18日

主査 藤沼 貴 文学部教授

委員 大久保典夫 文学部客員教授

委員 中野 毅 文学部教授

論文提出者

氏 名：高山京子（たかやま きょうこ）（女）

生年月日：1975年6月1日

論文題目

林芙美子とその時代

【論文内容の要旨】

本論文は、「序章 現代文学史のなかの林芙美子」につづき「第一部 出発期の林芙美子」「第二部 小説家への道」「第三部 林芙美子と戦争」「第四部 戦後の成熟と完成」、それに「結章」「主要参考文献」「おわりに」が加わり、全体として四百字詰原稿用紙に換算して1,100枚の労作である。

「序章」で論者は、従来の林芙美子研究が、彼女の特殊な実人生に還元される傾向が強かった点に触れ、日本の近代が生んだ代表的な女流作家にしては、総体的にみてその研究は不十分な状況にある、という問題提起とともに、彼女が時代と社会環境のなかで揉まれ、文学上のさまざまな流派と接点を持ちながら、一方では出発期からかたくなに自己の資質を守り続けた点に着目している。そして、本論文の目的は、林芙美子と彼女が生きた時代背景、社会機構、そこでの他の作家とのかかわりを考えるとともに、個々の作品やその方法の分析を通じて、できるだけ林芙美子のトータルな文学的人間像を抽出することにある、としている。

「第一部」では、まず「第一章 林芙美子とアナキズム——詩人としての出発」において、女学校を卒業後上京した芙美子が、職を転々としながらアナキズム文学者と交流を持った時期を扱っている。まず、日本のアナキズムの歴史を概略的に論じながら、芙美子の詩について、方法意識などには乏しく、基本的には感情の迸りを書きとめたものであった、と述べている。しかし、芙美子のその後の文学を特徴づける自己対象化・客観化の視点が見られるのは注目すべき点だという。

アナキズムとの接触は、思想的な共鳴ではなく、同様の境遇に育った者同士の相互扶助

的な連帯感によるもので、文壇への縁をつくるきっかけにもなった。そして、この時期を題材にした「放浪記」は、戦前の男性優位の社会において、女性が作家として自立していくのがどれほど困難なことであるかを示している、と指摘している。

「第二章 『放浪記』の成立」では、「放浪記」の成立、改稿の過程について整理し、そのイメージがいかに形作られたのかを論じている。幾度となく改稿が重ねられて現行のものとなったこの作品は、初出では散文詩に近く、現在の流布本では限りなく小説に近い。その改稿の背景には、発表当時は無名の一女性の記録である「放浪記」が、私小説における〈主人公イコール作者〉という概念の影響を受け、作家・林芙美子の〈放浪記〉として肥大化した現象だと指摘する。

「第三章 『女人芸術』とのかかわり」においては、まず、第一次大戦後の女性の社会進出による女性雑誌増加の背景と、1928年（昭和3）7月に創刊された「女人芸術」との関連についての概略を述べている。「女人芸術」は当初、大衆化時代の要求にこたえた誌面づくりをしていたが、徐々に左傾していく。林芙美子は28年10月号の「秋が来たんだ——放浪記——」の掲載以降、同誌の花形作家になるもやがて離反、それは忘恩的な行為とも受け取られているが、論者はそこで、芙美子があくまでも個々の資質に根差した文学作品を求める発言を行なっていることに着目、芙美子はやはり作品の優劣を二の次にするようになった「女人芸術」に耐えきれずに離れたのだろう、としている。

「第四章 林芙美子と尾崎翠」においては、まず伝記的事項として二人の交流が述べられ、さらにそれぞれの代表作である「放浪記」と「第七官界彷徨」を取り上げている。翠の作品は当時の前衛的なモダニズムの色合いが濃く、映画のカメラワークやモンタージュ理論を取り入れた虚構の世界を構築しているのに対し、「放浪記」はあくまでも主人公の生活実感に支えられたドキュメンタリーのような性格を備えている。その後、翠は間もなく筆を折り、芙美子は小説家として大成していくが、この分岐点は実生活だけが原因ではなく、伝統の摂取の有無にあるという。

「第五章 『三等旅行記』の世界」では、渡欧体験をもとに書かれたこの作品を、世界的に旅行記というジャンルが氾濫した1920年代から30年代前半という時代のもとに位置づける試みがなされている。ロシア人やフランス人との交流を描く場面について、論者は、幼い頃から放浪を繰り返していた彼女にとって、究極的に国境というものは意味を持たない、としている。それに対し、同時代の宮本百合子や横光利一の旅行記には、〈日本〉対〈西洋〉という図式があって、特に横光の場合は、すぐれた文明批評になっている箇所があるが、芙美子のもは「放浪記」の延長のようになってしまっている憾みがある、としている。

「第二部」の「第一章 子どもの世界——『風琴と魚の町』」においては、まず結末の見事さをあげ、芙美子の作品で、特に子どもの世界を描いたものには、一種哀切なトーンのあることを指摘する。芙美子は生れた時から貧しく不幸であったというイメージが先行しているが、実際は、彼女が実父の庇護を受けていた時期の暮らしはまだ裕福であり幸福であった、という。父と別れて以後の母・養父との放浪生活は彼女にとって没落を意味しており、その大きなものとして、不就学が原因で小学校卒業が遅れたこと、各地を転々とするために徹底して〈余所者〉であった点を挙げている。この没落の悲しみと疎外感が、彼女の作家的な資質の核になった、というのだ。

「第二章 『清貧の書』の新しさ」では、発表当時、宇野浩二に激賞されたこの作品は、〈手紙〉が重要な役割を果たしているといい、主人公である〈私〉の母親、夫の與一は、その手紙によって人間像が浮かび上がる仕組みを取っている。同時にこの作品は、女流作家にしてはきわめて珍しい視点が働いている作品である、という。つまり、女流作家のいわゆる私小説では、自己憐憫や、主人公が〈男〉の被害者に仕立てられることが多い。しかし「清貧の書」では、男性関係も激しく、ひねくれた妻を持った夫の與一こそ被害者ともいえるので、その点では「清貧の書」は大変ユニークな作品である、としている。

「第三章 文体の完成——『牡蠣』」では、詩から三人称の客観小説への転換を遂げた「牡蠣」について、芙美子が私淑した徳田秋聲の文体との関連を中心に論じている。まず論者は、この作品が、プロレタリア文学運動壊滅後の〈文芸復興〉の機運のなかで発表されたというのは象徴的な意味を持っている、という。これはインターナショナルナリズムからナショナリズムへという世界の動向と呼応しており、そのような意味では芙美子の作風の転換ははからずも時代と歩調を合わせている。芙美子は「牡蠣」において秋聲の文学の特徴である、作者が時には語り手として、時には登場人物の内面に入り込み、その人物になりきって描写をするという方法を会得、このような主観的な描写と客観的な描写の自由な往復が、小説世界に幅と厚みを加えることになったといっている。

続く「第四章 林芙美子と〈性〉——『稲妻』をめぐる」では、女流作家において、芙美子は〈性〉を描く先駆者であり、「稲妻」でも、登場人物を通して女の〈性欲〉といったものが見事に剔抉されている、と述べている。しかしその〈性〉とそこから派生する〈血縁〉を描こうとしたこの作品は、作者の複雑な出自をモデルとしているが、芙美子は実人生におけるその複雑な血縁関係を築いた究極の存在である母親への批判を、この小説において試みた、という。「稲妻」の挫折は、それはそのまま、彼女にとって〈性〉と〈血縁〉の問題が如何に重いものであったかを示している、というのだ。

「第三部」では、林芙美子の戦時中の活動が細かく検証されている。まず、「第一章 南京視察」においては、1937年（昭和12）12月の南京視察のルポタージュから考察する。ここから、その後彼女が戦争へ深入りしていく要素を見、南京事件の様子は一切省かれ、戦場で〈女〉として歓迎される彼女の喜びの方が多く書かれていると指摘している。

「第二章 漢口従軍」では、まず38年におけるペン部隊結成の経緯が概略的に述べられている。林芙美子はその一員として中国に渡りながら、他の作家を出し抜く形で漢口入城一番乗りを果たし、ジャーナリズムの寵児となった。その際の記録が『戦線』や『北岸部隊』であるが、これは日常の身辺雑記の域を出ていないという。続く「第三章 南方へ」においては、41年12月の太平洋戦争勃発以後、報道班員として東南アジア方面へ派遣された約八ヶ月に焦点が当てられている。男性作家の場合は徴用を拒否することは許されず、生命の危険も伴うものであったが、女流作家の徴用は辞退も可能であった。論者は同行の佐多稲子などの文章も参考にしながら、この南方視察が徴用とは名ばかりのものであり、実際は豪華な観光旅行であった点を指摘している。

「〈補〉林芙美子におけるその他の戦争協力的行為」において、先の三章には当てはまらない戦地慰問や国策文学の執筆について補足を行ないつつ、総括を行なっている。芙美子の戦争協力の性格は、〈女〉あるいは作家の特権を最大限に利用したものであり、その華々しさはすべて彼女が育ってきた底辺の環境とはおよそかけ離れたものであった。戦争があっ

たからこそ、彼女はそのような地位を手に入れることが出来たのである、という。

「第四部」は、林芙美子の作家としての真価は戦後に発揮されたとの主張から、より多角的に論じられている。「第一章 反戦文学」においては、林芙美子が数多く発表した反戦文学について言及されている。とくに敗戦直後のものは、反戦の思想が前面に出ており、それは当時の風潮を如実に反映したもので、エンゲルスのいう〈傾向文学〉に過ぎないという。そのような意味で、彼女の戦中の行動と表裏一体のものだと批判している。しかし時間の経過とともに作品世界の深化が認められ、「下町」「河沙魚^{かわはぎ}」「骨」などになると、直截的な反戦の言辞は影をひそめ、内発的となり完成度も高くなる、といている。

続く「第二章 〈断絶〉と〈連続〉」では、まず「作家の手帳」「夢一夜」といった疎開生活に取材した作品から、〈八・一五〉を軍国主義からの〈解放〉であると同時に、文字通り敗戦という〈挫折〉であったと受け止めた芙美子の複眼を解明している。論者はいくつかの作品を例にあげながら、その複眼の骨子を成すものは、作者における過去と現在との揺れにあり、それは小説の登場人物にも反映されている、という。

「第三章 文学的成熟——『晩菊』を中心に」では、林芙美子の作品系列のなかで、完成度においてはおそらく最高の域に達している「晩菊」を中心に、そこに描かれた世界と文体について考察している。この作品は、徳田秋聲や王朝女流文学の文体を駆使し、一分の隙もない完璧なものとなっている。また、重要なのはこの作品において、戦時中への郷愁を断ち切り、現実の幻滅を描ききったことである、といている。

「第四章 挫折の形象化——『浮雲』Ⅰ」「第五章 デカダンスの美学——『浮雲』Ⅱ」では、敗戦における日本人の〈挫折〉、そして林芙美子自身の戦争中の華々しい活躍からの〈転落〉を作品として結実させた「浮雲」（「風雪」昭和二四・一一～二五・八、「文學界」同年九～二六・四）について、前者では作品の構造分析を中心に、後者では底流にある独特のデカダンスについて論じている。これは、戦時中に仏領インドシナで無拘束の恋愛にふけた男女が、敗戦後、引き揚げてからもずるずると関係が続ける物語である。二人は仏印での甘美な思い出を引きずっているが、敗戦で荒廃した国土と虚脱状態のなかではかつてのように情熱が燃えることはない。そしてついにはさいはての屋久島まで流れていくことになるが、女は発病、大咯血をして死に、男は一人取り残される。

主人公の男女には、戦争によって恩恵を受けたという罪障感が尾を引いており、芙美子はここで、二人に託して自身の懺悔を試みているのである、といている。芙美子は「浮雲」の「あとがき」で、「神は近くにありながら、その神を手さぐりである、私自身の生きのもどかしさを、この作品に描きたかつたのだ」と記している。デカダンスには高みから墮ちるの意が含まれており、その高みとはいうまでもなく〈神〉である。

彼女の「浮雲」執筆の背景には、以下のようなことが考えられると論者は指摘している。すなわち、幼少期からつぶさに辛酸をなめてきた彼女には、外界（他者）への不信と絶望があった。それを逆手に取る形——他人や環境を利用することで、作家的地位を築き、その行為の極点が、戦争協力であった。その結果、自分ではからずも日本という国とその国民を荒廃に陥れる戦争に加担していたと知った時、彼女ははじめて自分自身にも絶望したのである。「浮雲」は、そのようなおぞましい人間の一人としての自己への救済が塗り込められている、というのだ。

「第六章 家庭小説にみられる先見性——『茶色の眼』『めし』」では、最晩年の上記二

作を通じて、林芙美子が日本の家族制度の崩壊を予見していたことが指摘されている。ここに登場する夫婦は、いずれも単調な日常生活に退屈を感じている。これらの作品は戦後の家庭小説の流れにおいて先駆的ともいえる要素を持っている、と指摘する。

「第七章 三人の女流作家——宮本百合子・林芙美子・平林たい子」では、世代も文学の出発もほぼ同じであった昭和を代表する三人の女流作家について述べられている。論者によれば、百合子と芙美子・たい子の二人には両者を分かつ決定的な特徴があるとし、それは自己相対化の有無である、という。さらに、百合子は、大正時代の白権派的な人道主義の影響を受け継いでいること、林芙美子や平林たい子の場合は、それ以後の横光利一などに代表される、自我絶対主義が崩壊した時代の文学である、との文学史的観点も提示されている。

それをさらに敷衍する形で、「第八章 林芙美子と平林たい子」では、主として描写方法の違いから二人の相違点が明らかにされている。たい子の代表作は、主人公以外の登場人物の内面に入り込まない一元的な視点に立ち、芙美子の場合は、作者は、語り手としての視点を持ちつつも、描く対象の内面に入り込み、その人間になりきって小説を書いている、という。このような方法の代表的な作家として、前者では岩野泡鳴、後者では徳田秋聲をあげることができる。自然主義を代表するこの二人の作家の文体が、奇しくも昭和を代表する二人の女流作家に受け継がれたということは非常に興味深い、と述べている。

「第九章 女流文学史のなかの林芙美子」では、まず「放浪記」が例としてあげられている。この作品は、散文と詩（和歌）を組み合わせるといって平安以来の日記文学の形式を踏襲している点に加え、その世界も女流日記文学の祖とされる『蜻蛉日記』と共通のものとして、男性を踏み台にして不朽の名作を完成させている点をあげている。また、芙美子の作品のなかで最も完成度が高い「晩菊」は、文体の密度を出すために、「 」で区切られる会話文も地の文のなかに織り込んで、改行を極端に減らすという手法を取っている。これは樋口一葉が好んで用いた手法によく似ていて、こうした手法は古典に顕著であるとし、紫式部に代表される王朝女流文学の系譜は、近代に入って一葉に受けつがれ、さらに芙美子へと継承された、と論者は主張する。

最後の「第十章 林芙美子と大衆文学——『絵本猿飛佐助』を中心に」では、戦後に書かれた大衆文学、なかんずく「絵本猿飛佐助」について論じている。ここではまず、芙美子の大衆文学は完全に黙殺されてきたという問題提起が行なわれ、この分野に踏み込んだものは本論文が初めてである、と述べている。「絵本猿飛佐助」には自在な〈語り〉があって、さらに登場人物に託し、作者が思い切った戦争批判を試みている点が重要である。彼女が大衆文学の枠組みを借りてまでこのような作品を書いたのは、この形の方がリアリズムの小説より反戦思想が表現しやすかったからに他ならない、という。また、大衆文学の源流とされる口承文芸との関連として、作者が幼少期からの放浪生活のなかで講談や浪花節に親しみ、口上の語り口が命とされる行商やてきや商売の両親のもとに育ったことがその素養につながったのではないかと考察している。

そして、戦後になって彼女が独自の成熟を遂げたことの背景には、戦争協力に対する痛切な悔悟があり、大衆文学へ手をのぼしたのも、そのひとつの現われだと考えられる、と述べている。

「結章」では、各章の総括とともに、全体のまとめを行なっている。林芙美子の幼少期

からの放浪体験は、環境などのいわば〈対象〉に入りこんでいく自在さと同時に、決してそこに同化しきれない資質を培ったとし、それが時には登場人物の内面に入り込み、時には客観的な視点を持つといった文体に結びついたという。そして、彼女の偉大さは、そのような自己の資質をかたくなに守りつつも、自己の世界に閉じこもることなく他者、つまり時代の波に揉まれることで発展させられたことにあるといい、林芙美子は、誰よりも激動の時代とまともに付き合いながら、そこに呑まれることなく成熟を遂げた稀有な文学者であるということが出来る、と結んでいる。

【論文審査の要旨】

I 本論文のねらい、構成

本論文の目的は、林芙美子という近代を代表する女流作家について、彼女が生きた時代背景、他の作家とのかかわりを考えるとともに、主要作品やその方法の分析を通して、林芙美子という稀有な作家のトータルな文学的人間像を描出することを主眼としている。

全体は四部構成になっていて、第一部では出発期の林芙美子を扱い、第二部では詩人から小説家への転進を、主要作品の分析を通して精細に論じている。第三部では林芙美子の戦争協力の実態について述べ、第四部ではその罪障感がいかにして戦後の作家としての成熟につながったかを考察している。

従来の林芙美子の研究は、どうしても彼女の特異な生涯に還元される傾向が強かった。その理由は、彼女の生い立ちによる。林芙美子は、1903（明治36）年12月31日、現在の福岡県北九州市門司区に私生児として生れたことになっている。これは、井上隆晴が72（昭和47）年に発表した「林芙美子と北九州」によるもので、それまでは、生前はおろか死後しばらくの間、1904年、山口県下関市出生説が有力であった。これはほんの一例にすぎず、行商人の子として各地を転々とした幼少期、職業遍歴を重ねた青年期など、林芙美子の伝記的事項は今もって不明な点が多い。このような伝記的研究の代表的なものは板垣直子の『林芙美子の生涯 うず潮の人生』（昭和40）や平林たい子の「林芙美子」（同44）といった研究であり、その穴を埋める形で竹本千万吉『人間・林芙美子』（同60）や井上隆晴『林芙美子とその周辺』（平成2）といった研究書が出ている。

林芙美子研究で画期的な役割を担ったのが、森英一の『林芙美子の形成——その生と表現』（平成4）であった。これは、全篇が林芙美子の精緻な作品論で構成されており、彼女の代表作といわれるものをすべて網羅している。その後、テキスト論や都市論の流行とともに、「放浪記」を中心に林芙美子の再評価が高まる。たとえば1989（平成元）年11月より、平凡社から海野弘・川本三郎・鈴木貞美らの編集のもと『モダン都市文学』全十巻が刊行された（91年4月に完結）。このアンソロジーは、従来の文学史の観点では埋もれてしまった作品を掘り起こすとともに、1920年代以降を、現代都市生活の成立した時期として文学史を読み替える作業を試みているといえる。この中に林芙美子の『三等旅行記』をはじめとした随筆が収録された。こうした流れのなかで、近年最大の林芙美子研究の書ともいえる川本三郎の『林芙美子の昭和』（平成15）が出ている。これは、どちらかといえば彼女の作品の内実に沿ったものではなく、昭和という激動の時代に比重が置かれている。

しかし、これまで述べたいずれにおいても、林芙美子という作家をトータルに捉えてい

るとはいい難い。それは、作品論・作家論・イデオロギー批評など、いずれかに重点を置けばどれかは欠落してしまう、という文学研究の難しさにも起因すると思われる。個々の作品分析についてもその数はまだ少ない。日本の近代が生んだ代表的な女流作家にしては、これはきわめて不十分な状況といわねばならないだろう。本論文では、林芙美子と彼女が生きた時代背景、他の作家とのかかわりを考えると同時に、個々の作品やその方法の分析を通じて、できるだけ林芙美子のトータルな文学的人間像を抽出することを、第一の目的としている。

またさらに、従来の林芙美子研究において、特に欠落しているものは、彼女の戦中・戦後の文学活動に関する徹底的な研究である。林芙美子は、先の戦争に最も深く関わった作家であり、戦後に作家としての真価を發揮したにもかかわらず、戦争賛美との関連性を明らかにした研究はこれまで皆無だった。本論文は、戦中・戦後の林芙美子に紙数を大きく割き、戦争に協力した作家の倫理観を問うのではなく、林芙美子の戦後における作家としての成熟と深化をもたらした要因が「戦争協力」にあったという観点で分析を行なっている。1930年代、世界はインターナショナリズムからナショナリズムへと転換を始め、それに歩調を合わせるかのように、芙美子は戦争へ深入りしていき、戦意高揚の特派員・報道班員として戦地慰問や国策記事・文学の執筆を悪びれもなく行った。そして敗戦の混乱のなか、そこに蠢く人間に題材を取り、数々の傑作を残して死んだ。彼女ほど時代と密接に関わった女流作家も珍しい。それと同時に、彼女ほど出発期からその文学的な資質を守り、深化させた作家も珍しいのである。本論文は、ある意味では林芙美子の〈不易〉（美意識と文体）と〈流行〉（時代との関連）を明らかにする作業ともいえる。

II 本論文の展開

林芙美子は1922年（大正11）、尾道高等女学校を卒業後上京し、本格的に作家（当時は詩人）を目差すようになるが、彼女の出発はまさに現代文学史のはじまりと時を同じくしているといえる。1920年代は、〈ジュネーブかモスクワか〉という合言葉に象徴されるインターナショナリズムの最盛期で、それ以降の文学の最大の特徴は、〈世界的同時性〉という点にある。世界の前衛芸術の動きなどは、ほぼ同時期に日本にも生起している。

本論文は、そのような時代に生きた林芙美子の資質を、さまざまな角度からあぶり出す形で展開されている。

第一部では、まず第一章で林芙美子が上京後、職を転々としながらアナキズム文学者たちと交流を持った時期に焦点が当てられる。論者は、この交流は、思想的な影響よりも、文壇での足がかりを得たいという欲求が強いと指摘、この時期の実生活の混濁のなかから生まれた「放浪記」の成功は、当時の女性が作家として自立することの困難をいかに示している、として、女流作家の業の深さということに論点をしばって追及している。つづく第二章は、死後も彼女の評価を左右することになる「放浪記」の成立、改稿の過程について整理し、そのイメージがいかに形作られたのかが論じられている。

第三章では、1928（昭和3）年7月に創刊された「女人芸術」の概観、「放浪記」の連載によって同誌の花形作家となった芙美子の活動と離反から、自己のみを唯一の拠り所とした彼女の資質を浮き彫りにしている。第四章においては、近年再評価の著しい尾崎翠

と林芙美子との比較を、それぞれの代表作である「放浪記」と「第七官界彷徨」を通して論じ、第五章では、芙美子が自身の渡欧体験をもとに書いた『三等旅行記』が、インターナショナルな時代を如実に反映していること、また彼女の資質や小説家としての観察眼が生きている旅行記であることを、宮本百合子、横光利一のそれと比較しながら考察していて注目されよう。

第二部では、各章において彼女の代表作とされる「風琴と魚の町」「清貧の書」「牡蠣」「稲妻」を取り上げているが、この過程は、そのまま彼女が詩人から小説家への道を歩んだことと照応しているといえる。まず第一章では、自身の幼少期を題材にしたこの作品と実生活との関連から、論者は彼女が自身の宿命を作家として如何に特権化していったのかを考察、それは放浪生活から生じる周囲との疎外感が核になったと指摘している。第二章では、「清貧の書」における〈手紙〉の効果、この作品に現れている自己対象化・客観化の視点を中心に論証している。

第三章では、詩から三人称の客観小説への転換を遂げた「牡蠣」について、芙美子が私淑した徳田秋聲の文体との関連において分析している。徳田秋聲の写実に学んだ作家は、林芙美子以外にも川端康成、中上健次など数多く、秋聲の文体を習得したことは、林芙美子のその後の大成につながったといえる。第四章では、芙美子は〈性〉を描く女流の先駆者であった点に着目し、自己の複雑な出自に取材するも途中で挫折してしまった「稲妻」から、彼女にとって〈性〉と〈血縁〉の問題が如何に重いものであったかを指摘している。

林芙美子には、女流作家のなかでも最も先の戦争に深く関わったという拭いがたい事実があるが、第三部ではその実態について詳細に論じられている。第一章においては、1937（昭和12）年12月、南京陥落に際して彼女の残したルポタージュから、女性としての特権を利用する姿勢について考察、続く第二章では、38年におけるペン部隊の一員としての活動について論及している。第三章においては、芙美子が41年12月の太平洋戦争勃発後、報道班員として東南アジア方面へ派遣された約八ヶ月に焦点が当てられている。同行の佐多稲子らの回想を用いながら、女流作家の場合、徴用とは名ばかりのもので実際は豪華な観光旅行であったと指摘、戦後の「浮雲」につながる体験として検証する。第三部の最後に、補論として芙美子の戦争協力の総括をするとともに、戦地慰問や国策文学の執筆などについても触れている。

第四部は、本論文における第一部から第三部までと比較して分量が多く、林芙美子の作家としての真価は戦後に発揮されたという論者の主張が反映されている。第一章では、芙美子が敗戦直後、数多く発表した反戦文学について言及、続く第二章では、その〈八・一五〉を軍国主義からの〈解放〉であると同時に、文字通り敗戦という〈挫折〉であったとした芙美子の複眼を、いくつかの作品を例にとって論証する。

第三章では、林芙美子の作品系列のなかで、完成度において最高の域に達している「晩菊」を考察しているが、「晩菊」の作品論は少なく、それだけでも意欲的な試みといえる。第四章、第五章では、林芙美子畢生の大作「浮雲」について、作品の構造分析、美学としてのデカダンスを軸に論じている。この作品は、敗戦における日本人の〈挫折〉、そして林芙美子自身の戦争中の華々しい活躍からの〈転落〉を作品として結実させたもので、同時に彼女が出発期から持っていたデカダンスを全面的に開花させた作品であると論者は指摘する。また、主人公の男女の描き方に、作者自身の戦中の行動についての罪障感が読み取

れるという。

第六章では、「茶色の眼」「めし」という、最晩年の家庭小説二作を通じて、林芙美子が日本の家族制度の崩壊を予見していたことを指摘、第七章では、宮本百合子・林芙美子・平林たい子という昭和を代表する三人の女流作家を比較検討することで、自己相対化の有無と、それぞれの資質の相違を明らかにしている。それをさらに敷衍する形で、第八章は芙美子とたい子の描写方法の違いを中心に論じている。

第九章では、平安女流文学の水脈が、近代の樋口一葉らを経て、林芙美子にどう受け継がれたかとして、日記文学としての「放浪記」、そして彼女の最高傑作である「晩菊」の雅文体の手法を軸に考察している。第十章では、戦後に書かれた大衆文学、なかんずく「絵本猿飛佐助」を中心に、反戦文学としての性格、大衆文学の源流とされる口承文芸と芙美子との関連、またなぜ大衆文学に手を染めたのかが考察されている。論者自身も述べているが、これはまったく未開拓の分野なので、本論文のなかでも特に注目すべき章だろう。

論者は、林芙美子の偉大さについて、自己の資質をかたくなに守りつつも、自己に閉じこもることなく他者、つまり時代の波に揉まれることで自己対象化・普遍性を獲得した点にあるといい、林芙美子は誰よりも激動の時代とまともに付き合いながら、そこに呑まれることなく成熟を遂げた稀有な文学者であると称揚する。

また戦後の彼女の成熟と作家としての完成を用意したものは、戦争協力をした自身の挫折感、罪障感であったと指摘する。戦後の林芙美子の最も評価すべき点は、安易に戦時中の自己を反省するようなことをせず、あくまで自身の内的な問題として、三人称の客観小説に形象化した点にあり、あくまで〈作家〉としての人生をまっとうすることで、罪を贖い続けたのである、と述べている。宮本百合子が、軍部の弾圧から解放された一組の夫婦（宮本顕治・百合子がモデル）という、一部の知的エリートの世界を描き、戦争の終結を謳歌したのに対し、芙美子は復員兵、戦争未亡人、パンパン、オンリーといった当時の庶民の実態や風俗、戦争がもたらす負の部分に題材に取り、文字通り敗戦の悲しみを描き続けた。戦後の芙美子の文学活動は、その自己の内面のドラマを、客観小説の枠組みを使ってひたすら書くことに尽きたという。論者によれば、私小説の手法を取らなかった分、その自己解剖は苛烈をきわめた。作者自身を主人公にする場合、どうしても自己を防御する働きが起こるため、その精神の恥部を剔抉するには不十分となる。三人称の小説の形式を使ったことで、彼女は逆に自分のすべてを打ち込むことが出来たのである、という。彼女の自己対象化といった資質も、その過程で全面的に開花し、その極北が「浮雲」であったと、指摘している。

初期の「放浪記」や「風琴と魚の町」などには、底辺の庶民との連帯感、相互扶助的な世界がある。また、客観的な作風に転じてからも、作者の下層庶民への共感は基本的には変らなかったといえるだろう。それが、一部知識人の一人として、国家権力の片棒を担ぐような道を進んでからは、彼女が根城にしてきた世界と一種の断絶感が生まれ、文学も荒廃した。彼女の文学の活力は、やはり民衆の日常の世界にあるのである。戦後になって彼女が独自の成熟を遂げたこと背景には、その戦争協力に対する痛切な悔悟がある。彼女が、敗れた国とそこにうごめく庶民と意識的に運命を共にしようとした時、いかえれば自己の出自や資質に真に居直った時、芙美子の文学は深化を遂げたと、林文学の新たな読みを提示した。

Ⅲ 総括

本論文は全体として、博士の学位授与に十分相当する綿密・精緻な研究がなされている。モダニズムと接した1920年代、伝統的なりアリズムへの転換をはかった30年代、40年代の戦争協力と敗戦による挫折感・罪障感の形象化と、いずれの時代に書かれたものでも林芙美子の作品はその風潮を如実に反映しており、現代文学史を象徴するような作家であるといえる。しかし本論文のような、林芙美子の人生、その歩んだ時代と社会と作品との具体的な関連を示すような、総合的な林芙美子研究というものは、これまで絶無であったといえる。はじめに述べたとおり、従来の研究は作品論・作家論・イデオロギー批評など、いずれかに比重が置かれており、林芙美子の全体像を捉えているとはいえないからである。

本論文は、以上の質的側面と量的な面双方において最大規模の林芙美子研究となるはずで、今後の研究の発展に少なからず寄与するものと信じている。林芙美子という一人の作家を、四百字詰で1,100枚書くというのは至難の技であったといえる。この論文は「林芙美子研究」として一つの礎石を築いた注目すべき労作であり、創見にみちている。以上の次第から、本論文は博士（社会学）の学位を授与するにふさわしいと判断する。

【最終試験の結果】

2006年（平成18）1月13日（金）、午後4時40分より文系C棟会議室で公開発表会を行い、終了後、審査委員による最終試験（口頭試問）を行った。

公開発表会の参加者は、教員6名、大学院生・学生20名であった。冒頭、執筆者に本論文の意図と概要、ならびに学術的意義を述べるよう促し、上記の内容要旨に基づく論文全体についての報告があった。報告終了後、報告内容について、とくに〈反戦文学〉としての性格、戦争協力と文学的深化の問題などについて質疑があり、補足説明が行われた。また、概念の明確化や発想の源泉などについての質疑応答があった。

公開発表会終了後、主査・藤沼貴、委員・大久保典夫、中野毅による最終審査委員会が開催された。論旨の不明な点、本論文において論じ得なかった諸点や今後の課題についての質問がなされた。単なる文学研究というレベルでなく、文学社会学や知識社会学による文学・文化研究の成果などもさらに自覚的に取り入れて、総合的な林芙美子研究、さらに新しい日本近代文学研究を目指してほしいとの指摘もあった。

いずれの質問にも適切に回答し、問題点や課題をも明確に認識しており、今後のさらなる研究の進展が十分に期待されることが明らかとなった。委員会は、本論文が的確かつ一貫した問題意識と周到な検討を重ねながら緻密な議論を展開し、学問的に貢献するところ多大な学術論文であると評価する。論文執筆者（学位申請者）は、博士（社会学）の学位を受けるに適格と認め、合格と判定した。